

ようかい
まにあつく

妖怪 マニアック



家で飼う猫の名前はどんな模様でも白黒斑の理由

シロクロマダラ

ワケ

私は若い頃から旅行が好きで、休みを利用してはふらりと当てもなく出かけていた。出来るだけ安く遠くへ、それも他の人が興味を持たないような所へ行くのが私の旅行の常だった。

十年前、私がふらりと辿り着いたのは、とある離島。そこは、おそろしく静かで寂れていて、物音と言えは小さな波音くらいな所だった。港には小さな漁船数隻が寄添うように浮かび、数人のお年寄りと猫が見える範囲に佇んでいた。漁船の成果を狙っているのか、お年寄りよりも遥かに猫の数が多い。

船から降りた私は小さく伸びをして、猫とお年寄りの好奇の視線を身体に纏わせたままフラリフラリと近くを散策し始めた。

いくら私が物珍しても、さすがに終始ついて回るような人はいないらしく、港から少し離れると好奇の視線はパラパラとほどけて落ちていった。何となく残念なようなほっとしたような気持ちで海岸沿いや小高い山など、本当に気の向くままにふらりふらりと1時間程歩いた。

そこは思ったよりこぢんまりとした小さな島で、どれだけ港から離れてもどこからか必ず海が見える。少し高い所に登るだけでとても見晴らしがよく清々しかった。海を眺めながらもう一度大きく伸びをして、旅の素晴らしさを噛み締めた。

その時、どこからか、か細い声が聞こえた。動物の鳴き声であると分かるのに、そう時間はかからなかった。

好奇心から声のする方にしばらく進むと、道から少し入った雑木林の中に炭焼き小屋の崩れかけたようなものがあった。その中から鳴声は聞こえていた。

鳴声から子猫だなど、思って小屋の中を覗くと真新しい段ボールの中に生まれたばかりの目も開いてない子猫が4匹もぞもぞと動き回っていた。

「かわいいなあ」

あまりのかわいらしさにつられて、1匹持ち上げようとした時おかしな事に気がついた。

尾が2本ある。というか先端の方で2股に割れている。すぐに、私の頭に田舎のばあちゃんの顔が思い浮かんだ。

>尾がふたつに割れてる猫はなあ、猫又つーなあ、お化けなんよ。<

思い出の中の、小汚い小学生が小馬鹿にしたように嘘だあ〜。とばあちゃんに悪態をついていた。黙れ！俺！！

私は、子猫のしっぽをなぞりながら、段ボールの中の子猫全ての尾が2股に割れているのを見た。

バチ猫と言う尾の短い猫がいるのは知っている。しかし、この2股は。。。なんだか、急に怖くなって段ボールから離れようとした。

「ただいニャ」

妙にすっとぼけたよく通る声が後から聞こえて、頭の中の祖母は直ぐに掻き消えた。私は驚いて振り返ると、白黒斑の少し大きめの猫がスーパーの袋を下げて2本足で立っていた。その白黒斑

のしっぽも二股に割れていた。

「みたニャ」

白黒斑は私を見ると、慌てるでもなく落ち着いて猫独特の大きな目で睨みつけた。

「み、見てないにゃ」

「嘘つくニャ」

一瞬にして冷や汗が流れる。白黒斑は、衝撃のあまり動けない私を尻目に段ボールの子猫達の数を確認している。子猫達の無事を確認すると、その内の一匹を抱き上げ嬉しそうにほおずりをした。

「まあ、いいニャ。どうせ生きて帰れないニャ。」

私は、その言葉でハッと我に帰り慌てて逃げ出そうとしたが、どうしても腰が立たなかった。

つい、昨日のニュースで、宇宙ステーションの建設がどうかという話題をテレビから流し聞いていた。日本はあらゆる分野で最先端と讃えられる事も多い。それが、今日！最先端の日本で化け猫に惨殺されようとしているのは、どう運命が転んだんだろう。

科学の時代にお化けなんかいないよお～、とエラそうに、ばあちゃんに雑誌のウンチクを垂れる小学生が吐いた唾が、今頃返って来たのかあ～！？全国のばあちゃんに謝れ！俺！

とにかく、この場を逃れようと必死で這って逃げようとした。あの世で、ばあちゃんがせせら笑っているのが聞こえた気がした。

すると、白黒斑は甲高い声で大笑いし始めた。

「嘘ニャ。」

「え」

「お前ら野蛮な人間と一緒にするニャ。わし等はもっと文化的ニャ。」

猫に文化を語られた私は、ヒキガエルのようなみっともない格好のまま振り向いた。白黒斑は落ち着き払ってニチャアと笑う。しかし、その笑顔は思惑とは裏腹に、とても文化的にも友好的にも見えなかった。

「ホントだったら魚の餌なんだがニャ、普段何食べてるか分からないような都会モン餌にしたら魚の方が迷惑ニャ。」

その時、私は魚の餌以下扱いなのだから、怒りがわいてきても当然のはずだった。しかし、驚愕と動揺の方が大きく心を占めていたので、怒るところかネコにしてはずいぶんと理論的だとさえ思った。魚、俺に謝れ。。。

「ずいぶんとデトックスなお考えで・・・」

魚の餌以下にされながらも、惨殺を免れたらしいので少しほっとしていた。当時の自分が情けない。俺、今の俺に謝れ。

「その代わりに。。。」

キタ！代償のお約束だ！命と引き換えに何かを約束させるんだな。民話や伝承のセオリーだ！私の口は堅い、貝の殻のゴトクだぜ！鍋に突っ込んだらすぐ開くけどな！心の中で雪女の夫のようなへまはしないぜ！と、勝手に数年先の箝口令までイメージトレーニングをしていた。

「島の人はもちろん！他の誰にも言いません！ゼー—————ッタイイ、言いません！」

私は、あらん限りの力で叫び、今日の事を他言しない約束をした。

白黒斑は冷めた目で私を見つめ、少し呆れたような口調で口を開く。

「別にいいニャ、島の人間とはうまくやってるニャ。こんな話、島の外の人間は誰も信じないニャ。お前本当に現代の人間ニャ？」

白黒斑は、私が渾身の力を込めて誓った言葉をアッサリと破棄した。しかも、現実に基づいた考え方で。。。。

「その代わりに、一生猫を飼うニャ。」

「一生。猫？」

白黒斑はにやりと笑うとかすかに頷いた。段ボールからは、いつの間に覗いていたのか子猫達が光る目で私を見つめていた。

その後、私はどうやって島を離れたのか記憶にない。どうにかこうにか帰宅したようだ。そして、島から帰ってしばらくしない内に私の家に1匹の猫が住み着くようになった。

それから長い間、最初の猫がいなくなると次の猫がいつの間にか住み着き、私の家には猫が途絶えた事がない。猫の名前は『シロクロマダラ』あの時白黒斑に約束した名前だ。たとえ、シマ猫だろうと黒猫だろうと、この名前を付ける。

気がつくと、シロクロマダラはいつでも私の側にいて私を見つめている、まるで何かの約束のように。そして、たまーに細く小さな高い声でニャーと鳴く。

妖怪マニアック

著者：華嵐三十浪

<http://p.booklog.jp/book/72260>

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/edaedy/profile>

感想はこちらのコメントへ <http://p.booklog.jp/book/72260>

ブックログ本棚へ入れる <http://booklog.jp/item/3/72260>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ